

「心友」大平君を偲ぶ

齋藤 晋 一

「サラリーマンと大平」……昭和四十六年五月十七日。その前月、宏池会会長になつた大平君が参議院選応援のため関西にきた。そして過密スケジュールのなかを一橋十一年の同級会に顔を出してくれた。場所は住友電工の朝寮である。その時テーブルを囲んだ十人くらいのクラスメートに語つた彼の言葉を、今でもみんなが覚えてゐる。「俺は君達が羨ましい。サラリーマンはまじめにやっつけていけばよいが政治の世界ではどうしても埃にまみれねばならぬことがある。これは俺の性に合わないんだ。だから君達が羨ましい」としみじみ語つた。それから私に向かつて「俺は香川県の西の海岸で生まれ、別子銅山の四阪島の煙突の煙を見ながら育つた。だから学校を出たら住友に入ろうと思つてゐた。それに住友という集団の持つ独特の雰囲気が好きだつたから。だがもし住友に入つていたら、今頃はせいぜいどこかの会社の人事か総務担当重役だつたらう。俺には君達のような会社経営の才がないからなア」。何か本当にそう思つてゐる面持ちだつた。私の想像では、彼のいうようなことになつてゐたか、しからざれば社長をとび越えて財界の大物になつてゐたか、とにかく中途半端はなかつたと思つた。

「友情無垢」……昭和五十一年末頃。三木政権の後任総裁問題で揺れてゐる時、われわれクラスメート有志が大平君を激励すべく何がしかの浄財を集め、そして私が男山の八幡宮に祈願をして、白い「破魔矢」を添えて瀬田の邸にうかがつた。ところが彼は「君達の好意は本当に有難いが、金は要らないんだ。好意だけいただいておくよ」といった。とにかくわれわれと彼との永い付き合いのなかで、一度も軍資金の話が出たことがなかつた。

このことは彼が友情というものを清純なままで大事にしたいという気持ちの現われであったと思う。

「信義有情」……昭和四十四年十一月二十九日。その日の午後、私の長女の結婚披露宴を名古屋のホテルでやることになってた。大平君も出席して祝辞を述べてくれる約束になってた。ところが折悪しく国会の解散がその翌々日に行われるという事態になってしまった。当時彼は佐藤内閣の通産大臣であり、宏池会の実質的リーダーであったから、私はてっきり断られるつもりで彼に都合を確かめた。ところがこともなげに「何とかやりくりして行くよ。ただ長くはおれないかも知れんが」といった。当日午後、東京から新幹線で駆けつけ、感動的なスピーチを述べてくれたあと、すぐ東京へトンボ返りした。お伴の秘書官に聞いたら、そのまま夜行で深夜福島入りをして翌日福島で応援演説をやり、その晩すぐまた東京へ引き返すのだという。恩きせがましいことは一言もいわず、このような友情を惜しみなく与えてくれた大平君は、私ども家族にとって神のような存在に見えた。

「細い目の眼力」……昭和四十二年九月五日。スリーハンドレッドでゴルフのお伴をした。三十九年に外務大臣を辞任して、党務に尽瘁している頃だった。三男坊の明君も一緒だった。その日は暑い日で、ワンラウンドして汗まみれで上がったら、大平君はいきなりサルマター一枚になってクラブハウスの側のプールにザブザブと入った。私も早速お相伴をしたが彼にしては珍しい茶目っ気ぶりだった。そのあと食堂で私の家内も一緒にビールを飲みながら雑談をした。談たまたま彼が今までに会った各国首脳達の人物評になって、その一人一人の人間像の描写、その性向や力量、政治との結びつきを克明に語ってくれたが、人間探究から始まる誠到大平君らしい深いこくのある洞察力に感銘を受けた。彼は同席のご子息にもこの話を通じてそれとなく人間教育をしていたのではないかと思う。爾来彼に会ったたびに、その柔和な細い目の奥からじっと人間の心底を覗かれているような気がしてならなかった。それはいつも「心の人間になれ」と教えているように思えた。合掌。（住友ゴム工業会長）